

## 仁和寺所蔵愛染明王坐像に関する一考察 —十二世紀前半における仁和寺と院政期—

荒井 優希 (早稲田大学)

仁和寺愛染明王坐像は、総高 99cm を測る六臂像で、愛染明王信仰が隆盛した十二世紀の作例として知られている。院政期の仁和寺における愛染明王信仰の実態は明らかになりつつある一方で、本像に関する専論はなく、その制作背景は不明である。本発表では、仁和寺に伝わる『御室相承記』等を通して制作背景を探り、仁和寺にとって本像がどのような意味を持っていたのかを明らかにし、仏師や制作年代についても提示したい。

『御室相承記』(鎌倉初期成立)は、歴代門跡についての経歴や事績について記す。永保二年(1082)十一月二十七日条に初めて愛染明王像が登場し、等身愛染明王像が白檀六寸薬師如来像や三尺孔雀明王像とともに北院で供養されたとある。その後、康和五年(1103)北院は回禄に見舞われて諸像は焼失するも、薬師如来像は同年に再興された。最終的に回禄以前と同様の三像が北院に揃うのは永久五年(1117)のことであるが、愛染明王像の法量は当初と異なり三尺であった。なぜ、薬師如来像とは対照的に愛染明王像は再興にまで十三年を要し、さらに等身から三尺へと変わったのか。ここには、幼い御室に替わって仁和寺を差配した寛助(1057-1125)が関係したと考えられる。院政期における仁和寺の繁栄は、御室と上皇との血縁関係によって支えられていた。火災時に御室であった覚行(1075-1105)は、院からの帰依も篤かったが、長和二年に早世、次の覚法(1092-1153)は十三歳と幼く、寺の維持経営に不安が生じた。成就院出身で嘉承二年(1107)に仁和寺の別当となった寛助は、そうした状況を解消するために、孔雀経法で効験をあらわしたり、大北斗法を新たに創案したりするなど、上皇たちの関心を引くことに奔走していた。こうした状況が、再興を十年以上遅らせたと考えられるのではないだろうか。また、寛助は同年に東寺二長者となったが、『阿婆縛抄』第百十五「愛染王」によると、後三条天皇即位のために愛染王法が勤仕されて以降、宮中における愛染王法は東寺僧たちが行った。この際の本尊であった愛染明王像は三尺木像であり、後に白河院御願の法勝寺円堂に移された。寛助は、これにならって仁和寺再興の愛染明王像も三尺にすることで、次代の御室が行う愛染王法にも効験があることを上皇たちにアピールし、院との強固な関係を維持しようとしたと想定される。

本像は十二世紀の作として一致している。顔の中央に目・鼻・口を集めた顔貌表現は円勢・長円作の仁和寺所蔵薬師如来坐像(康和五年)に類似し、更に十二世紀の明王像と比較すると、本像は大覚寺五大明王像(安元三年[1177]、明円作)とその表現に共通性を見出せる。しかし、大覚寺像に見られる写実表現よりは古様な表現を示しており、これを遡る十二世紀前半のものと考えられる。

以上を踏まえて、本発表では、本像が円派仏師による永久五年供養の再興像であり、院との関係強化による仁和寺存続を意図して制作された可能性を提示したい。